

京都帝国大学創設期の師弟が 関わった富山県会議事堂の建設

貴堂 巖¹

¹正会員 (株)ケイエステック (〒930-0293 富山県中新川郡立山町鈴木220)
E-mail:kido9126@pc.ctt.ne.jp

1909(明治42)年に完成した富山県会議事堂は、鉄筋コンクリート理論で明治の土木技術に貢献した京都帝国大学日比忠彦教授の設計によるものであった。また、富山県の担当技師杉村博通は京都帝国大学の開学とともに入学、卒業後高等官となり山形県、福井県、富山県等を歴任し、地方の土木行政に尽くしたが、再度の富山県赴任中退官し、庄川水力電気(株)の常務取締役として小牧ダムの建設に関わった。一方、富山市埋蔵文化財センターは2010年、富山城址公園内で発掘された議事堂の一部基礎部分の調査を行った。続く2013年夏に筆者は議事堂の平面図を発見した。これを契機に富山県会議事堂の建設経緯と関わりをもった土木工学者の足跡を明らかにするものである。

Key Words : Toyama prefectural assembly Diet, Tadahiko Hibi, Hiromichi Sugimura

1. はじめに

として活躍の場を移したことなど彼の経歴を辿った研究も少ない。

(1) 研究の目的

1909(明治42)年に完成した富山県会議事堂については、当時の写真帖等に掲載された外観写真と『富山県政史』第2巻に掲載された概略平面図からうかがい知ることができる。しかし、建設経緯や設計の内容、関わった人物たちの記録は断片的である。

本稿は議事堂建設の全体像を明らかにするとともに、工事に携わった工学者、技術者の経歴とその結びつきを考察する。次いで、2010年に富山市教育委員会埋蔵文化財センターが富山城址公園整備工事に伴う工事立会により実施した議事堂跡の調査内容と、筆者が2013年夏に佐藤家文書¹⁾で存在を確認した議事堂の平面図から判明したことを紹介する。

(2) 既往の研究

富山県会議事堂の完成にともない富山県が記録した『鶴駕奉迎録』²⁾によれば、設計業務は日比忠彦が構造を、武田五一が意匠を担当した。しかし、日比忠彦の業績は明治の土木技術史を語る際、度々登場するが³⁾、彼が設計した富山県会議事堂に関する研究は少ない。また、議事堂の建設の経緯や意匠・構造等についての研究も稀有である。

一方、富山県の担当技師である杉村博通土木課長については、富山大橋に関する白井の研究⁴⁾で触れられている。しかし、地道な役割であったせいか彼の大学時代や卒業後、内務官僚として地方自治体の土木行政でつくした業績や、電源開発事業の経営者

2. 明治時代の富山県会議事堂の変遷

(1) 石川県から分県後の初代議事堂

加賀、能登、越中で構成していた石川県から越中が1883(明治16)年5月9日に分離、富山県となる。同年に開催された臨時県会は、富山総曲輪の富山師範学校で開催された。その後、本願寺派説教場、神道協会場、総曲輪中学校等の建物を仮用して県議会が開催された。1887(明治20)年11月に初代の県会議事堂が新築されたが、1899(明治32)年8月、富山市の大火で類焼し、再び市内の寺院、師範学校、巡査教習所、富山市役所、富山県庁等を使用することとなった⁵⁾。

(2) 明治末の2代目の県会議事堂建設

県会議事堂を失った富山県は、その建設を1907(明治40)年の議会で議論している。1908年に東宮殿下(後の大正天皇)が岐阜、福井、石川、富山の4県を行啓されるとの御内沙汰の報があった。富山県はこれを幸機とし、県会議事堂を建設し、開場に先立ちまず宿泊所にあてる計画を立てた。そして1909年9月の竣工と同時に、5日間にわたり殿下の御駐輦を賜ることとなり⁶⁾、その後、11月21日に議事堂としての落成式を行い翌日から議会が開催され、県政討議の場として使用されることとなった。

3. 県会議事堂建設の経緯

(1) 県議会での予算審議

富山県議会は、1907(明治40)年11月の通常県会で、県会議事堂建築の支出額を明治41年度に46,686円、同42年度には50,074円を継続年期を以て支出すること決議している。なお、1908年9月臨時県会で殿下の奉迎設備に関する追加予算として26,466円が計上された。議案審議の際、議員から富山一の美観たる建築物にして欲しいという要請の他、各府県の議事堂の調査と専門の技術者と相談して建築すること、このような建築の当局の経験不足を憂いている⁷⁾。

(2) 設計者と設計仕様

前述したように、県会議事堂は京都帝国大学教授工学博士日比忠彦が構造を、工学士武田五一が意匠を担当した。1897(明治30)年7月に日比は東京帝国大学工科大学土木工学科を、武田は同大学の造家学科を共に卒業している。ここで武田について少し触れるが、彼の還暦を記念して発行された『武田博士作品集』⁸⁾によれば、1903(明治36)年に京都高等工芸学校教授、1907(明治40)年には京都帝国大学文科大学講師嘱託となる。1908(明治41)年5月9日大蔵省臨時建築部技師を兼務となったが、5月30日から翌年3月1日までアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア等に議院建築調査のため留学している。したがって、地元の新聞富山日報は1908年7月15日に日比忠彦と杉村博通が打合せを行ったことを報じているので、富山県議会議事堂の意匠設計を終えてからの渡欧と考えられる。建設に際しての設計書の存在が不明なため、ここでは議事堂落成式において、工事担当の杉村博通土木課長が行った工事報告⁹⁾と、前述の『武田博士作品集』および『鶴駕奉迎録』から設計内容を要約する。

a) 本館の規模

建坪 399.5坪 (1320.7m²)、木造2層建て、正面および裏面の両翼は平屋
議場は11間×9間の99坪(327.3m²) 周壁煉瓦造り
軒高 30尺2寸 (9.15m)
最高棟高さ 49尺5寸 (15.0m)

b) 本館の材料と内外装

主要材料：秋田産と飛騨産(ともに樹木名不明)
小屋梁：松、階段：樺、装飾用材：檜・桂・杉
尾背：陸前産石盤瓦・米国産マルソイド
避雷針：屋上8カ所
外装：胴蛇腹より下は尾張常滑産瓦(タイル)、胴蛇腹より上は漆喰塗
柱・長押・窓框の木部：ペンキ塗り
内部障壁：白漆喰塗
議場・格天井・貴賓室建具：ワニス塗
各室・廊下の建具：ペンキ塗
床：絨毯、倭織、リノリューム
暖房：ウェスター低圧蒸気式
2階の主な部屋の照明：金色シャンデリア



写真-1 1909年11月21日富山県発行
富山県会議事堂新築落成記念絵葉書(一部)

主要木材に遠方の秋田産木材(杉と考えられる)が使用されているが、300年近く前の1631(寛永8)年に神通川船橋の舟に秋田産が使用されている¹⁰⁾。また、『秋田県史』によれば、加賀藩の金沢城が1759年の宝暦の大火にあった際、秋田の佐竹藩から杉の材料が贈られている。加賀・越中が秋田産の木材を採用することは珍しいことではなかったようである。

c) 基礎

基礎杭は生松丸太(径、長さ、ピッチ不明)、均しコンクリートの上を煉瓦と中国産花崗石を混用したセメントモルタルで畳積し、所々に鉄棒(アンカーボルト)を植え、土台木を貫通し緊結した。

d) 付属建物

湯沸所・気罐室の建坪は30坪(100.7m²)

e) 工費

本館、付属建物、内外装飾費含め合計 134,620円92銭3厘

f) 意匠

前述の『武田博士作品集』の解説を引用すると

「フランス復興式を加味せられた屋根勾配急な建築物。会議室の周壁は煉瓦造であるが、他は全部木造である。壁体の下部はクリーム色のタイル張りである¹¹⁾」

と記述されている。写真-1は県会議事堂の完成を記念して富山県が発行した絵葉書の一部である。

(3) 施工者と建設工程

1908(明治41)年7月に起工し、1909年9月に完成した。施工は佐藤組(現佐藤工業㈱)¹²⁾、棟梁瀬川外次郎、世話役岩城権四郎であった¹³⁾。

1909(明治42)年の東宮殿下の富山県内の巡行では、9月29日～10月2日まで、宿泊所として利用された。議事堂建設地は元監獄跡地であった。このことから2階に貴賓室を設けることについて、不浄地に建てることに非難の声があったので、1908年8月の地鎮祭では、県下で初めて祭式により、不浄地除けの行事がなされた¹⁴⁾。工事工程の詳細を記した公文書の存在は不明であるが、落成式での杉村博通土木課長の工事報告と当時の新聞、富山日報の報道をもとにした建設経緯を表-1に記す。

表-1 富山県会議事堂の建設工程

年月日	内容
1908. 7. 15	日比京都帝国大学教授、富山県庁知事席で永井内務部長、杉村土木課長と議事堂設計の打合せ
1908. 7. 22	議事堂敷地測量
1908. 7. 23	議事堂の向きを県会希望の南から東に変更
1908. 8. 7	地鎮祭
1908. 9. 2	基礎工事、煉瓦工事が完了
1908. 10 月末	粗建工事完了
1908. 11 月末	建具工事、壁工事、屋根工事完了
1909. 早春	土壁、ペンキ塗り
1909. 4. 1	本館竣工
1909. 9	付属建物竣工
1909. 9. 29-10. 2	東宮殿下(後の大正天皇)宿泊
1909. 11. 21	皇太子写真拝戴式、議事堂落成式
1909. 11. 22	新議事堂で議会開催

なお、新議事堂落成式は11月21日に行われ、翌日から議会が開催されたが、12月2日、強風により議場部分の陸屋根(平屋根)18.5㎡(5.6坪)ばかりが吹き飛び雨漏りが発生した。杉村土木課長が応急処置を指揮したが議事中止となり、翌日宇佐美勝夫知事(山形県出身、1896年帝国大学法科大学政治学科卒、1908年3月知事に就任¹⁵⁾)は議会に対し陳謝した¹⁶⁾。

以後、1935(昭和10)年に建設された新県庁に議事堂が移るまで、56回の県会が開催された。議事堂移転後は「大正会館」と改名され、講演会や会議に利用された。1940(昭和15)年には、県立図書館が設置され広く市民に利用されたが、1945(昭和20)年の富山大空襲で焼失した¹⁷⁾。

4. 設計者日比忠彦と富山県土木課長杉村博通

(1) 設計委託の経緯

富山県が議事堂の設計をどのような経緯で、当時土木・建築界で鉄筋コンクリート理論をリードしていた日比忠彦と京都電鉄、関西美術院、京都府記念図書館等¹⁸⁾を手掛け注目されていた武田五一の二人に委託したのか不明である。二人の帝国大学1年先輩の宇佐美知事の来県は工事着工直前であり、依頼したと考えられない。そこで日比忠彦と富山県の建設責任者で人物像についても不明な点が多い杉村博通の関係を経歴を通して照合してみることとする。

(2) 日比忠彦の略歴

表-2 に日比忠彦の年譜を示す。1873(明治6)年に福井県で生まれる。1894(明治27)年に帝国大学工科大学土木工学科に喜三太名で入学し、在学中に忠彦と改名している。3年生のとき特待生となり¹⁹⁾、1897(明治30)年7月に名簿の筆頭で卒業した。

その年の6月に勅令第209号をもって、京都帝国

表-2 日比忠彦年譜

西暦	事暦	出典
1873	6. 20 福井県士族日比登の三男喜三太として誕生	稲村徹元:『大正過去帳』, 東京美術, 1973
1894	7 月第一高等中学校卒業	大蔵省印刷局:官報第3308号 M27. 7. 10 喜三太の名で卒業
1897	7 月東京帝国大学工科大学土木工学科卒業	東京帝国大学:『東京帝国大学卒業生氏名録』, p. 146, 1926
1897	京都帝国大学理工科大学土木工学助教授第二講座分担	京都帝国大学:『京都帝国大学一覧』従明治30年至明治31年, p. 31, 1898
1902	4 月震災予防調査会臨時委員	国立公文書館蔵:京都帝国大学理工科大学助教授日比忠彦以下五名震災予防調査会臨時委員命免ノ件
1902	9 月ドイツ、フランスに留学	官報 第5753号 M35. 9. 5, 『大正過去帳』, 東京美術
1904	アメリカを視察して帰朝	『大人名事典5』, 平凡社, 1954
1905	1 月教務の都合により休職	国立公文書館蔵:京都帝国大学理工科大学助教授日比忠彦休職ノ件
1906	4 月教務の都合により復職	国立公文書館蔵:休職京都帝国大学理工科大学助教授日比忠彦復職ノ件
1906	8 月京都帝国大学理工科大学教授	官報 第6942号 M39. 8. 16
1906	8 月機械工学第四講座担任から土木工学第三講座担任	官報 第6943号 M39. 8. 20
1907	11 月工学博士の学位を授与	官報 第7310号 M40. 11. 8
1909	9 月台湾へ出張	官報 第7873号 M42. 9. 20
1909	9 月建築学講座と土木工学第三講座担任	官報 第7874号 M42. 9. 21
1911	3 月満洲へ出張	官報 第8323号 M44. 3. 24
1918	福井市水道事業の顧問就任	福井市 HP, 水道事業のあゆみ
1920	欧米の建築界を視察	『大人名事典』第5巻, 平凡社, 1954
1921	6 月1日逝去	『大正過去帳』

大学の設置が裁可された。次いで文部省令第8号により理工科大学が9月11日より開設され、土木工学科と機械工学科が置かれ、両学科に教授、助教授、講師、助手等計14名が就任した。日比忠彦は土木工学科助教授として名を連ねている²⁰⁾。

研究者としての業績には1891(明治24)年に発生した濃尾地震の翌年、政府は震災予防調査会を設置したが日比は臨時委員として参加した。1902(明治35)

年に田辺朔郎委員とともに木材の性質、抗張・抗压試験、横断試験を行った「木材強弱試験報告」²¹⁾を辰野金吾調査会長に、また1905(明治38)年にも田辺朔郎委員と枕木の配列と軌条の振動との関係、バラストの厚薄、地質の硬軟が軌条の振動におよぼす影響等を関西鉄道の加茂駅と拓殖駅構内の実験により解析した「鉄道軌条振動験測報告」²²⁾を真野文二調査会長に提出している。1913(大正2)年に発行された『鉄筋混泥土の理論及其応用』は土木学会の戦前の名著百選に選定されている。また、高橋逸夫との共著「混泥土の弾性係数に関する実験」は1921(大正10)年に土木学会論文賞を受賞している。

建築設計家としての業績には、横浜伊勢崎町に1908(明治41)年に完成した3階煉瓦作りの越前屋呉服店²³⁾、1910(明治43)年に完成の武田五一が意匠設計したRC造り2階建ての京都商品陳列所がある²⁴⁾。その他、1922(大正11)年に完成したRC造り地上2階、地下1階の京都大学建築学教室建物(旧館)は、武田(意匠・計画)と日比(構造)が設計した²⁵⁾。日比が富山県会議事堂のような木造と煉瓦からなる建築の構造設計に関わったことは珍しい。

(3) 杉村博通の略歴

表-3 に杉村博通の年譜を示す。東京都出身で第一高等学校工科卒業後、1897(明治30)年9月に京都帝国大学理工科大学土木工学科に入学した。土木工学科の同年12月末の在籍者は32名であったが、最初の卒業生は1900年(明治33)年7月の18名である。杉村は同年10月の卒業である。残りの者は翌年の11月にかけて順次卒業または大学院に進学している。当初金太郎と称したが大学在学中の1899年～1900年頃に博通と改名している。

当時の第3学年のカリキュラムには、「意匠及製図」が1月から10週間の間、毎週32時、「卒業論文及計画」が4月以降毎週39時と時数が定められていた²⁶⁾。京都大学には杉村の卒業研究である四条大橋の176枚の英語論文(Esaay on Proposed Shijyo Bridge)と8枚の設計図面が保存されている²⁷⁾。

設計の内容は、橋長が295.2ft(約90m)、有効幅員は45ft(約13.7m)の規模である。5径間で構成され、支間割は、34ft+34ft+120ft+34ft+34ftであり、120ft(36.7m)の中央径間は主構7本の鉄骨トラスアーチ構造である。支間34ft(10.4m)の側径間はコンクリート製か鋼製かは不明である。

杉村は卒業の翌年7月に高等官となる。山形県技師、福井県技師を歴任後、1907(明治40)年5月に富山県技師となる。着任後、前年富山県内に発生した黒部川、常願寺川、神通川等大河川の大洪水の後始末や井川田、山田川、熊野川の中河川の大改修²⁸⁾と道路、橋梁の整備を進めた。続いて富山県会議事堂と神通新大橋の建設²⁹⁾にとりかかっている。

紅林・前田・伊東の研究³⁰⁾によれば、明治末から大正初期にかけて、富山、石川、福井の各県で6橋のコンクリートアーチ橋の施工が確認され、意外の感があると記述されているが、杉村が福井・富山

表-3 杉村博通年譜

西暦	事暦	出典
生年 不詳	東京府生まれ 金太郎と命名	大蔵省印刷局:官報 第4205号 M30.7.9名簿より
1897	7月第一高等学校工科卒業 9月京都帝大土木工学科入学	官報 第4205号 M30.7.9 京都帝国大学一覧, p.135, 1898
1900	10月京都帝大土木工学科卒	京都帝国大学一覧, p.194, 1901
1901	7月高等官に銓衡される	国立公文書館蔵:任免裁可書明治34年任免卷十七
1901	7月山形県技師	官報 第5409号 M34.7.15
1904	9月福井県技師	官報 第6358号 M37.9.7
1907	5月富山県技師叙高等官五等 7月内務部土木課長	国立公文書館蔵:任免裁可書明治40年任免卷十三 富山県公文書館蔵:明治40年任免通知簿
1910	9月群馬県技師叙高等官五等	国立公文書館蔵:任免裁可書明治43年任免卷二十四
1913	10月福島県技師叙高等官四等	国立公文書館蔵:任免裁可書大正2年任免卷三十一
1915	10月富山県技師叙高等官三等	国立公文書館蔵:任免裁可書大正4年任免卷二十四
1918	8月富山県退官 従五位勲六等	国立公文書館蔵:任免裁可書大正7年任免卷二十
1918	8月浅野合名会社 に最高技師として入社	北陸政報, T7.8.14
1918	9月正五位を授けられる	国立公文書館蔵:任免裁可書大正7年任免卷二十
1919 ～ 1931	9月庄川水力電気(株)設立に伴ない 常務取締役 に就任	電気之友社編:『電気年鑑昭和2年』, p.255. 1927 久保田雄二:『日本電力(株)十年史』, 日本電力(株), p.504, 1933

両県の土木技師として赴任していた際の影響も考えられる。

1898(明治31)年の京都帝国大学発行『京都帝国大学一覧』従明治30年至明治31年によれば、「学生ノ身体ヲ壮健ニシ心身ノ修養ヲ謀ル」ことを目的として「京都帝国大学運動会」が組織されていた。会長は初代総長の木下広次、採鉱学を担当する比企忠教授が幹事、庶務課長が会計をつとめ、学生4人が委員であった。同書を辿ると卒業までの3年間、杉村はこの会の委員を務めている。

1907(明治40)年4月27日の地元新聞、北陸政報は福井県技師杉村の富山県への転任内定の記事の中で次のように報じている。

「福井県では軽断の処置を為したる由にて吏員にはその憤怒に触れ、免職になりしもの数多くあり、非難の声もありしと言うが果たして富山県に転任せば久しく沈静したる土木界も氏によりて一花咲かすことあるべしと語るものがある」

杉村は体育会系の仕事に厳しい人物だったと推察される。1910年から群馬県、福島県に転任、

1915(大正4)年に再び富山県技師となる。1918(大正7)年、富山県を依願退職し、富山県出身の実業家、浅野総一郎が興した浅野合名会社に最高技師として入社、その後、浅野が1919(大正8)年に設立した庄川水力電気株式会社に転身した。この会社は、1925(大正14)年に富山県を流れる庄川に小牧ダムの建設に着工するが、杉村は1928(昭和3)年の『土木建築工事画報』第4巻第9号に建設中の小牧ダムの工事写真を投稿している。

当時の発電・送電会社の役員名簿を掲載した『電気年鑑』³¹⁾には、1931(昭和6)年まで庄川水力電気(株)の常務として紹介されているが、1932年以降の消息は不明である。

庄川の小牧ダム・小牧発電所、黒部川の小屋平ダム・黒部川第二発電所の工事に従事した石井頼一郎は、1925(大正14)年から1928(昭和3)まで庄川水力電気(株)の電気土木課長を務めたので³²⁾、杉村博通とは上司と部下の関係だったことになる。

庄川の小牧ダム、黒部川の小屋平ダム、黒部第二発電所、目黒橋等のデザインで石井頼一郎に協力したとされる山口文象と杉村博通の接点は不明である。

(4) 日比忠彦と杉村博通の接点

京都帝国大学が創設された1897(明治30)年に、日比は土木工学第二講座分担の助教授に就任し、その後、『京都帝国大学一覧』(従明治32年至明治33年)によれば土木工学第四講座分担の助教授となる。一方、杉村も開学時に入学し、1900(明治33)年に10月に卒業している。従って、京都帝国大学創設時の3年余の間、日比と杉村は師弟の関係であった。このような事情から富山県から日比に設計が委託された可能性が高いと推量される。

5. 議事堂跡の発掘調査³³⁾

(1) 発掘調査の時期と対象位置

富山県教育委員会埋蔵文化財センターは、2010年10月～12月にかけて富山城址公園整備工事に伴う工事立会調査を実施した。対象地には1909(明治42)年

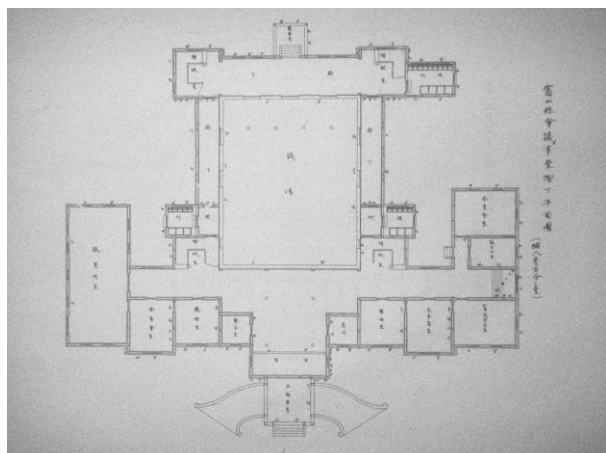


写真-2 富山県議事堂一階平面図(佐藤家文書)

完成の県議会議事堂跡の本館正面に向かって左側の議員控室、正副議長室の一部と本館裏面建物の一部および附属建物(湯沸所・気罐室)が含まれた。

(2) 調査結果

県議会議事堂の平面主軸は真北から西へ14度振られていた。本館の基礎は幅110cm～120cm、高さ約20cmに栗石が敷かれ、コンクリート製フーチングは幅100cm、厚さ約30cmあり、その上に幅70cm、高さ24～30cmのイギリス積みで煉瓦が積まれていた。

議事堂から約10m離れた位置で付属建物の湯沸所・気罐室(ボイラー室)の一部も発掘された。気罐室には煙突までの長さ6mの煙道があり、床面に使用された煉瓦には「AISANTAIIKA」と刻印されていた。当時、愛知県碧海郡(現在の愛知県三河地方矢作川の右岸一帯)に「愛三土管煉瓦同業組合」³⁴⁾が存在していたので、同組合生産の耐火煉瓦と推定される。

6. 発見した平面図と発掘調査結果との照合

(1) 議場と部屋の配置

筆者が見出した県議会議事堂の平面図は、縦55cm×横75cmの用紙に縮尺1/100で作図された「富山県議事堂階下平面図」と「富山県議事堂階上平面図」の2枚である。写真-2は一階平面図である。

正面から見て、左右対称の間取りで、階下の議場は四方を廊下で囲まれ、広さは奥行き11間(20m)×幅9間(16.4m)、面積328m²である。左右両翼は議員控室、委員会室、知事高等官室等にあてられている。階上は玄関上に5間(9.1m)×5間(9.1m)の貴賓室が設けられた。議場は吹き抜けで、三方を傍聴席が取り囲むように配置されている。階段は4カ所に設置されている。

(2) 発見された平面図と発掘データとの照合

発掘された基礎部分の測量データと照合した結果、図面に書かれた寸法が発掘された基礎のセンター軸と同一であった。このことから、発見された平面図は実際施工されたものであることが確認できた。これにより富山の近代化を支えた県議会議事堂の実態が判明し、城址公園の土地利用の変遷や当時の土木史を解明する上でも貴重な資料となった。

7. おわりに

1909年に完成した富山県議会議事堂については、前述したように第二次大戦で焼失したことや参考となる資料が無かったため、不明な事柄が多く、話題に上がることも少なかった。あまり知られていないが京都帝国大学理工科大学土木工学科の設置とともに着任した日比忠彦と後に名建築家と称された武田五一、加えて同大学土木工学科第一期生の杉村博通が

関係していた。即ち、京都帝国大学創設時の師弟が富山県会議事堂の建設に関わったことを紹介できた。

杉村博通はその後、庄川に建設された当時東洋一と言われた小牧ダム建設に経営者としてかかわりをもった。彼は、土木史の分野ではあまり取り上げられていない人物であるが、明治時代の地方自治体の土木行政における技術者の役割を理解する上で興味をひかれる人物である。同時に、当時電源開発に注力した事業家浅野総一郎のもと、経営者として活躍した業績も研究する必要がある。

また、富山城址公園の整備に伴い、議事堂の一部ではあるが発掘により得られた調査結果と筆者が発見した平面図をよりどころとして、その実像をある程度明らかにすることができた。

一方、日比忠彦と武田五一が設計した、斬新な意匠の木造と煉瓦で造られた複合構造の富山県会議事堂が北陸地方の建築界に及ぼした影響については不明である。

謝辞：杉村博通の卒業研究に関しては京都大学大学院工学研究科川崎雅史教授、地球工学系事務室、地球系図書室の方々に、また、県会議事堂の資料調査には富山県公文書館に大変お世話になりました。発掘調査の情報には富山市教育委員会埋蔵文化財センター鹿島昌也主査学芸員のご協力をいただきました。誌上を借りて感謝申し上げます。

参考文献・資料

- 1) 現在の富山県砺波市東開発発祥の佐藤組(現佐藤工業(株))の創始者佐藤助九郎家に伝わる文書類。
- 2) 富山県：鶴駕奉迎録，p.155，1909.
- 3) 例えば、村松貞次郎：鉄筋コンクリート構造の歴史，コンクリート・ジャーナル，Vol.6, No.11，1968 や豊島光夫：コンクリートと施工法，コンクリート工学，Vol.18.No.11，1980 および、山根巖：明治末期における京都での鉄筋コンクリート橋，土木史研究自由投稿論文，第20号，2000.等がある。
- 4) 白井芳樹：富山大橋の建設に関する研究(その1)，土木史研究講演集 Vol.23，土木学会，pp.323-332，2003.
- 5) 富山県：富山県政史県会第二巻，pp.114-117，1937.
- 6) 前出5)，pp.123.
- 7) 富山県会編：明治40年通常富山県会議事速記録，pp.210-211，p.391，1907，及び 前出5)，p.900.
- 8) 武田博士還暦記念事業会編：武田博士作品集，経歴 pp.2-3，1933.
- 9) 前出5)，pp.124-125，1937.
- 10) 富山県：富山県史 史料編IV近世中，p.1227，1974. に所収の改作方旧記附録「加賀藩史料」.
- 11) 前出8)，作品解 p.35.
- 12) 佐藤家文書に佐藤助九郎の施工実績を知事から証明された下記の文書が残されている。

証明書

(申請者の住所・氏名略)

富山県会議事堂並ニ農事試験場事務室等建築工事
金拾五万参千七百円也 請負契約 明治四十一年七月
竣工 全四十二年九月
右工事請負候事御証明被成下度此段奉願候也
明治四十四年六月六日 佐藤助九郎印
富山県知事濱田恒之助殿
右相違ナキヲ証ス 富山県知事濱田恒之助印

明治四十四年六月六日

- 13) 富山県建築協会：建築沿革史，p.23，1937.
- 14) 水間直二：明治の富山をさぐる-総曲輪を中心として - p.120，1979.
- 15) 秦郁彦編：日本近現代人物履歴事典，東京大学出版会，p.81，2002.
- 16) 富山県議会編：富山県議会史 第2巻，富山県議会事務局，pp.833-834，1979.
- 17) 富山市教育委員会埋蔵物センター：西の丸で見つかった県会議事堂跡，p.2，2010.
- 18) 前出8)，pp.7-9.
- 19) 大蔵省印刷局：官報第3910号，明治29年7月11日.
- 20) 京都帝国大学：京都帝国大学一覧，pp.31-32，1900.
- 21) 田辺朗郎・日比忠彦：木材強弱試験報告，震災予防調査報告 第40号，pp.19-63，1903.
- 22) 田辺朗郎・日比忠彦：鉄道軌条振動試験報告，震災予防調査報告 第55号，pp.1-46，1905.
- 23) 豊島光夫：コンクリートと施工法 材料における移り変わりー鉄筋ー，コンクリート工学，vol.18, No.11，p78，1980.
- 24) 村松貞次郎：鉄筋コンクリート構造の歴史ーRC建築の発達ー，コンクリートジャーナル，vol.6，No.11，p.43，1968.
- 25) 渡辺史夫：コンクリートの研究と新桂キャンパス，京都大学工学広報 No.49，2008.
- 26) 前出20)，pp.32-35.
- 27) 京都大学広報委員会：京大広報 2000.12，No.552，p.979. 杉村博通の卒業研究は非公開のためデータは京都大学地球系図書室・土木100周年記念資料室の提供.
- 28) 北陸政論，「杉村土木課長勇退」，1918年8月14日.
- 29) 前出4)，pp.326-327.
- 30) 紅林章央・前田研一・伊東孝：わが国における第二次世界大戦以前のコンクリートアーチ道路橋の変遷，土木史研究 論文集 Vol.24 土木学会，p.81，2005.
- 31) 電気之友社編：電気年鑑，電気之友，1927-1931の5年間にわたり杉村博通が庄川電気(株)の常務取締役として掲載されている.
- 32) 土木学会附属図書館デジタルアーカイブス，土木貴重写真コレクション：庄川・小坂・黒部川第二発電所ー石井頼一郎旧蔵写真集.
- 33) 前出17).
- 34) 新愛知新聞，1920(大正9)年2月7日，神戸大学電子図書館システム新聞記事文庫 窯業(1-153).

(2014.4.7 受付)